

## 羽子板と押絵

お正月の風物詩に、羽根つきは欠かせないものです。また、厄除けの縁起をかついで買い求める羽子板市や、女兒出産の時邪気をはね（羽根）のけるために羽子板を贈る風習も古くからあり、私たちの生活に溶けこんでいました。

羽子板そのものの歴史は古く、永享四年（一四三二年）正月遊戯として、男女二組に分かれて羽子つき勝負（こぎの木勝負）を行ったという記録が「春聞後記」しゅんぶんこうきに記されています。

羽子板は「羽子木板」はこぎいたと呼ばれ。「羽」を省き「こぎ板」となり、後に「木」が省かれて「羽子板」と呼ばれるようになったのです。当時は、遊び用具であり、板に持ちやすくするための握り手をつけた手製の簡単なものでした。

現代のような押絵羽子板は、江戸文化が成熟した文化文政のころ生まれたと伝えられています。その華やかな押絵は今から約六五〇年ほど前、中国の宗の時代に日本に伝わった民土芸術の一つです。

押絵とは、後年になまった言葉で御衣裳絵ごいしやうえというのが正しい名称でした。珍らしい高価な織物を集めて、それを配色よく統合し、一つの作品にまとめたものをそう呼んでいたのです。

龜山天皇の御代、京都の紫宸殿ししんでんの板ふすまに、殿上人が中国の聖賢の絵姿を蜀紅しよつこうの錦、今の唐織で現わしたという話が有名です。押絵細工に関する記録としては、これが一番古いようです。

こうして押絵は、中世における貴族たちの余技として発達しました。室町・桃山時代を経て、徳川時代に千代田城の大奥で御殿女中の中に手芸品として盛んに流行し享保（一七一六年〜一七三六年）のころから民間においてこれを業とする者が現われました。

いろいろな作品に仕上げられた押絵は、額面や小屏風こびょうぶ、羽子板、手文庫などに貼り付け、美しい装飾品として大変人気がありました。幕末には、立派な職業の一つとして認められるようになったのです。

春日部は、桐材の産地であったため、戦前は彩色や飾りのない羽子板の木地を生産し、東京方面へ出荷していました。その始まりは、桐小箱や桐ダンスが春日部で生産されるようになった元禄期（一六八八年〜一七〇四年）と同じ時期と推測されます。

春日部での押絵羽子板の歴史は新しく、戦争中、東京から押絵作家七名が、木地の産地である当市へ疎開してきたのが始まりです。

春日部の押絵羽子板の特色は、女のものには綿を厚目に、いきな江戸つ子姿には薄めに入れたりし立体感があり、生命力を感じさせるものです。現在では、羽子板と共に開店祝い額の歌舞伎押絵なども生産され、室内装飾の芸術品として、高く評価され、生産額においても全国一となっています。

※昭和五十二年から六十回にわたり続きましたこの歴史余話も今回を持ちまして終了させていただきます。

初出「広報かすかべ 昭和五十六年十二月」かすかべの歴史余話